

造

形

JOURNAL

特集

子どもの資質・能力(授業課題・目標)の育成と授業デザイン【佐々木達行】…………… 03

- ・三つの資質・能力を育む視点から絵の授業を捉えてみよう【高橋智子】
- ・立体の授業で捉える資質・能力とは—三つの柱を柱組みとして—【池田吏志】
- ・アクティブ・ラーニングとしての図画工作・美術の授業—三つの「資質・能力」を育てる教育方法の実際—【降旗孝】

表紙の1枚 パウル・クレー「腰かける子ども」【本田悟郎】…………… 02

ちかごろ気になる…………… 15

- ・自由と枠と創造性【横田次男】
- ・鑑賞の授業はやっぱり楽しい【宮地初穂】

美術館探訪 埼玉県立近代美術館…………… 16

教材研究【小学校】 トントンくぎ打ち、コンコン ビー玉【長尾宏一】…………… 20

教材研究【中学校】 人の形・動きをとらえる【平賀卓也】…………… 22

VOL. 63-2

2019 No.434

開隆堂

※本資料は「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

感性と理性の間に —パウル・クレーの芸術

宇都宮大学教育学部 准教授 ^{ほんだ ころう} 本田悟郎

薄赤色の暖かな背景に白い椅子が置かれている。微かな笑みを浮かべ、子どもがその椅子に腰かけている。水彩絵の具による線描から導かれた数個の矩形は、あまりに簡素な形の組み合わせである。そこに、これまた、端的な描写で目と口と認識できる点が描き加えられ、穏やかな子どもの姿が浮かび上がる。

パウル・クレー (Paul Klee) の《腰かける子ども》は1933年の作品である。1933年とは、ヒトラーの首相就任とともにナチスの弾圧が強まった年にあたる。クレーはバウハウス退職後、デュッセルドルフ美術学校で教鞭をとっていたが、この年、美術学校を追われ、ベルンへの移住を余儀なくされた。かの「退廃美術展」にクレーの作品17点が並んだのは、4年後のことである。

クレーは近代の絵画探究に早くから身を投じた画家であった。その関心は伝統的な絵画技法よりも同時代のキュビズムなどに向けられ、色彩と形態が豊かに交わるイメージの形象化を実現した抽象作品へと至った。

また、クレー自身はシュルレアリスムとは一定の距離を保っていたが、1925年のシュルレアリスム展にクレーの作品も紹介され、シュルリアリストたちからも注目されている。当時クレーは近代の絵画生成に欠くことのできない画家の一人であった。

一方で、クレーの関心は同時代の芸術動向のみならず、象形文字や児童画、そして、何より自身の幼年期のスケッチにも向けられた。クレーは自身の幼年期の描画を、「これまでの創作のうちで最も重要なもの」と呼んでいたという。(※1)クレーの絵画は、自発的な創造性と理論的な分析という相容れないかのような、二つの要素で成り立っていたのではないだろうか。

1921年、クレーはバウハウスに招聘された。クレーは学生に授業をするにあたり、自らの制作で感覚的に認識していたことの理論化に努めた。

「授業をすることになって、私は自分がたいい無意

識に行っていたことを明確にしなければならなかった。」(※2)と述べているように、クレーはバウハウスで、自らの作品が成立するプロセスとその造形性を正確に追体験できるように「造形理論」の詳述に取り組んでいた。微細な線からフォルムと形態を導き、抽象的な形に少しの具象性を加えることで、子どもの姿を描出させた本作品には、この時期の探究を経た一つの答えを見ることができよう。

クレーは、子どもの創造性を愛し、感覚的な理解を確かな造形理論へ繋げ、色彩と形態を探究し続けていた。この単純化された形態による《腰かける子ども》は、まさに、感性と理性の間に導かれた存在なのかもしれない。



腰かける子ども (紙、水彩、41.9×31.7cm) 1933年
パウル・クレー (1879～1940/スイス)
宇都宮美術館蔵(栃木県)

※1 展覧会図録『パウル・クレー だれにもないしょ。』2015年、宇都宮美術館、p.28

※2 『バウハウス叢書 パウル・クレー 教育スケッチブック』1991年、中央公論美術出版、p.54

子どもものの資質・能力（授業課題・目標）の育成と 授業デザイン

1 教育における「資質・能力」と「授業課題・目標」の意味

新学習指導要領が告示され、改訂の柱として三つの「育成を目指す資質・能力」が示されました。

学習指導要領の基本的な骨格は、「目標」と「内容」として示されていますが、三つの「育成を目指す資質・能力」とは、「目標」の捉え方と言い換えることもできません。

ここでは、三つの「資質・能力」を手がかりに、造形・美術教育のあり方や「授業課題・目標」、「授業デザイン」の方法等を確認、再考していきます。

さて教育は、あるいは授業は子どもを教え、育てるために行われるものです。その教え、育てるものが「資質・能力」ということです。

この「資質・能力」を教育、授業

の視点で捉えると、大きくは「授業課題・目標」、具体的な授業では「授業課題・目標」ということになりま

す。ここでの「課題」とは、授業者がどのような「授業課題」を掲げ、子どもに「目標」をもたせるか、授業者の役割を示すために使い分けています。授業者が子どもに「育成を目指す資質・能力」、あるいは「授業課題・目標」を明確に捉えて授業を行うことの重要性が問われているのです。

2 三つの「資質・能力」の柱

三つの「資質・能力」は、本来人の中に一体化されて培われるものであり、それぞれを「授業課題・目標」として分析、整理して具体的に示すことは、かなりの困難を伴うでしょう。

それは、「学びに向かう力、人間性等」と「思考力、判断力、表現力等」の二つの「資質・能力」は、知識や技能とは異なり、教えることができない、育てる「課題・目標」であるからです。

つまり、今改訂は、「教える」に偏った教育から「育てる」教育に焦点を与え、本来の教え、育てる「教育」のあり方を模索するものであるといえます。

3 造形・美術教育における三つの「資質・能力」の意味

○「学びに向かう力、人間性等」

この柱には、興味や関心、積極性、自主性、主体性、協働性、協調性、社会性、自己肯定感（価値観）、自尊感情等があり、相対的な意味、概念をもった大きなくくり（カテゴリー）

（リー）の課題・目標と捉えることができません。

例えば、「主体性」について、子どもに「主体的に活動しなさい」と教えても、主体性が培われることはありません。つまり、教えることができない、育てる「課題・目標」ということです。

また「自主性」という文言は単独では生きて働きません。つまり、何について働く「自主性」なのか、教科内容と関連してはじめて意味をもつということです。

造形・美術教育では、どのような教科内容と関わった「自主性」を育てるのか、具体的な「課題・目標」として示す必要があります。

○「思考力、判断力、表現力等」

この柱では、活動の行為としての文言、「思考、判断、表現」に「力」



をつけ、能力として示しています。「活動行為」自体は「課題・目標」になりませんが、能力にすると設定できるのです。これは授業デザインとして重要な視点です。各文言を考えてみましょう。

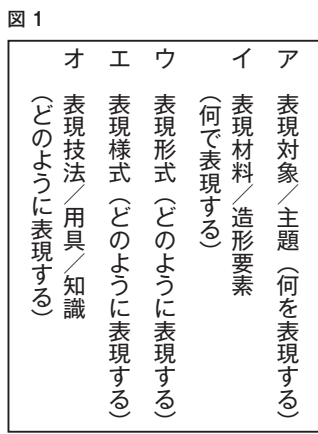
(力)、追究(力)、決定(力)、試行(力)、等があります。以上の文言も前項で示した内容と同様に教科内容と関連してはじめて生きて働くものになります。例えば、「判断(力)」は、何を「判

「思考(力)」では、想像(力)、発想(力)、構想(力)、創造(力)、分析(力)、整理(力)、活用(力)、応用(力)、俯瞰(力)、関係の把握(力)、総合的処理(力)等、さまざまに考えることができます。「判断(力)」は造形活動の中の一つの行為であり、同列のくくりには、選択(力)、発見(力)、

「断」するのか、教科の具体的な内容を通して造形的な「判断力」が培われるからです。つまり、造形・美術表現は試行錯誤を伴った活動全体を通して行われ、単独の「活動行為」だけでは成しなないのです。さて、造形・美術教育における「表現(力)」は、他教科とは少し違った解釈が必要になります。単に表現する技術力ではなく、「思考(力)・判断(力)」等を含む総合的な力と捉えられるのです。それでは、その「造形表現力」とはどのような能力でしょう。私は次のような視点から捉えています。

・造形感覚(力)
造形は視覚と触覚を通じた表現です。視覚は色彩感覚と形態感覚、触覚は触覚で、これらの造形感覚を働かせる活動です。しかし、表現は五感(視覚、触覚、聴覚、味覚、嗅覚)全体を通じた感受(インプット)、鑑賞が前提で、全ての感覚が重要になります。しかし、造形表現(アウトプット)は、主と

して視覚と触覚を通じたものです。
・五つの内容要素に対する追究(力)
「造形表現力」は、造形表現のすべての内容要素に関わり、それらを追究し、乗り越えるために発揮される力になります。表現内容の要素を五つに分析、整理した概要を図1に示しておきます。



○「知識及び技能」
この柱は、特に解釈する必要はないと思いますが、「技術」ではなく、技術的な能力、「技能」と示していることを確認しておきます。また、技術、技能にもいくつかの視点があることを加えておきます。
・表現技術、用具の技術
・表現形式、表現様式の技術
・材料処理としての技術

・用具の使い方の技術、他

4 「資質・能力」の育成と「授業デザイン」

造形・美術教育において「授業デザイン」について述べられることは少ないようです。

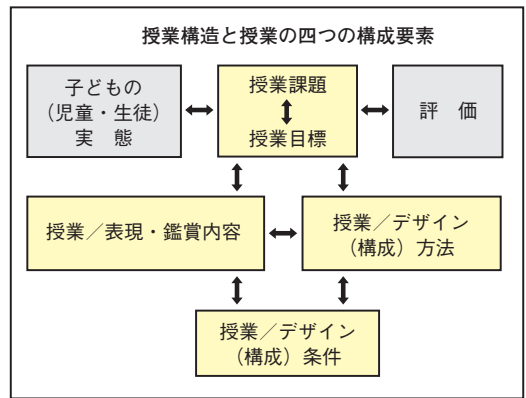
知識や技能の教育において、授業はそれらの教え方、つまり「指導方法」があれば十分であるからでしょう。しかし今回、示された三つの「資質・能力」には、前項で述べたように「育てる」「資質・能力」である「授業課題・目標」の重要性が示されています。

それでは、それらを達成するためにはどのような「授業デザイン」を、どのような「デザイン方法」で行えばよいのでしょうか。

文科省が提案している一つの「授業デザイン」が「アクティブ・ラーニング」ということです。

私は「授業デザイン」について、授業の四つの構成要素から、客観的、論理的に捉えた「授業デザイン」を提案しています（図2）。

図2



「アクティブ・ラーニング」も授業デザインの方法の一つであるともいえるのです。

一方、**図画工作科の学習指導要領**にはすでに、「造形遊び」があります。材料、場や空間等を課題（テーマ）に遊びの場や環境を設定し、子どもに試行錯誤や追究活動を促していきます。これは教えることができず、造形的な主体性や協働性、思考力（発想、構想力）、判断力、表現力等を育てようとする授業デザインに他なりません。

「造形遊び」は、材料、場や空間

等を課題（テーマ）にした、「課題追究型」の授業デザインの二つの方法ということです。

5 育てる「資質・能力」を培う授業の「デザイン方法」

教えることができない「資質・能力」を育てる「課題追究型」（含む造形遊び）の授業のデザインで大切なことは、造形表現の五つの内容要素について、どのような範囲や規模、条件で主体性や協働性、思考、判断、表現、あるいは知識や技能の試行錯誤を促すか、条件を明確にしておくことです。

教えることができない、相対的な意味や概念、価値を捉えた「資質・能力」、「課題・目標」と造形表現の「内容要素」を曖昧あいまいにしておくことと教育の質や内容も曖昧となり、効果が期待できないのです。

つまり、「課題追究型」の授業デザインは、「資質・能力」、「授業課題・目標」と「造形表現の内容要素」の二つの視点から、それぞれの「デザイン条件」を設定することが重要に

なるのです。

「活動行為」、「授業課題・目標」と「五つの内容要素」の2視点から授業デザインを捉え、デザイン条件を設定する関係表を参考資料図3として示しておきます。

また、図1～3の授業デザインとデザイン条件について、詳しくは左記文献を参照ください。

図3

表現・鑑賞の「内容要素」と「活動行為／授業課題・目標」の2視点から捉えた授業の「デザイン条件」の設定		「活動行為」 試行錯誤する 追求する	「授業課題・目標」 試行錯誤力 追求力を育てる
何を	表現対象 表現主題		
何で	表現材料 造形要素		
どのように	表現形式 表現様式 表現技法 造形知識		

引用文献：
・「造形教育における授業デザインと授業分析」
2011年 佐々木達行（東洋館出版）
・「造形教育における授業の課題・目標と評価」
2012年 佐々木達行（開隆堂出版）



三つの資質・能力を育む視点から 絵の授業を捉えてみよう



絵に表す活動では、さまざまな視点から授業づくりに取り組む必要があります。序論で指摘されているように、授業が多面的な構造で成り立っているためです。中でも最も大切にしたいことは、新学習指導要領でも示されている授業目標（育成を目指す資質・能力）の明確化です。絵に表す活動では、単に作品をかくことやその出来栄が目指されるわけではなく、学習過程を通して、子どもに育みたい資質・能力を明確にすることが重要になります。

絵に表す活動では、子どもが自らの感性や想像力を働かせて、感じたこと、想像したこと、見たこと等から表したいこと（主題）を見つけ、自分なりの新たな意味や価値をつくり出すことが求められます。そのためには、子どもの実態や授業目標を



2年生「かぞくとはなびをみたよ」

もとに、子どもが主体的に「やってみたい」と思えるような授業課題を設定する必要があります。絵に表す活動では、観察を重視した内容（風景画や生活画等）やイメージを重視した内容（想像画等）等の広がりが見られます。これらの内容について、三つの資質・能力の視点から具体的に考えていきます。

「知識及び技能」では、子どもの表したいことをもとに感覚や行為を通して造形的な視点を理解したり（知識）、表し方を工夫したりするこ



と（技能）が大切です。「かぞくとはなびをみたよ」では、自身の経験をもとに花火を見た時の感動が表現されています。空高く打ち上げられた花火を見上げている自分、夜空に広がる光、形や色のおもしろさや音等が、水彩絵の具とバスの使い分けや「吹き流し」を用いた効果的な表現から伝わってきます。表したいことをもとに表現材料や技法・様式等を子ども自身が考えたり、授業者と一緒に考えて教えたりすることができるとよいものです。

「思考力、判断力、表現力等」は、発想力や構想力の視点から捉えることができます。絵に表す活動では、表現対象が異なる場合でも、表現対象をもとに子どもが感じたこと、想像したこと、見たこと等から表したいことを見つけて絵に表す（新たな意味や価値をつくり出す）プロセスは同じです。表現対象の選択は、授業で育成を目指す資質・能力によって決定されます。例えば、観察や体全体で感じたことからイメージを広げて表したいことを見つけ、形や色、

構図等の表し方を考える方を育成したいと考えれば、風景等を設定することができま。また、テーマをもとに自分の願いや夢、記憶や知識等を結びつけて自由にイメージを広げて、構想を練る力を育成したいと考えれば、想像画



5年生「鯉のぼりのしっぽをつかまえよう」



今日は図工の授業で絵をかいた。いつも見ていた校舎も、改めて見ると知らないことがたくさんあることに気づくことができた。外壁には換気扇のような口がついている。校舎の角ばった形や質感、空と屋根の色のコントラスト。絵をかくことを通して、自分は身近なものをしっかり見ていないのではないかと感じた。もう一度、自分の周りの世界をよく見てみようと思った。

大学生のかいた「小学校の頃の印象的な出来事」の絵日記

等を設定することができます。「学びに向かう力、人間性等」では、子どもが造形的な視点を持ち、形や色に関わりながら、主体的に取り組む態度や楽しく豊かな生活を創造しようとする態度等の涵養を旨とします。絵に表す活動では、見たり想像したり、かいたりする魅力や楽しさに興味をもつこと、自分なりに表し

たいことを見つけて、主体的に表現しようとする態度や、身近にある形や色等のおもしろさを感じ、美的に感じる心を育むこと、自他の個性を認め、豊かに関わろうとする態度等を育成することが期待されます。

最後に、大学生が「小学校の頃の印象的な出来事」をかいた絵日記を紹介します。この学生は、図工で絵

をかいたことを振り返っています。絵をかくことが「作品をかくという経験」のみに留まらず、その過程において造形的な見方・考え方を働かせ、自身のものの見方や捉え方を発見・認識すると共に、見ることの新たな意味や価値をつくり出している姿がここにはあります。こうした学びのある活動になるためには、授業

課題・目標を明確にし、授業を多面的な視点から捉えて構成していくことが必要になります。



高橋智子
(たかはし ともこ)
静岡大学
准教授

立体の授業で捉える資質・能力とは —二つの柱を枠組みとして—

本稿では、立体の授業においてどのように三つの資質・能力を捉えればよいのかを検討します。

そこで今回は、粘土を材料とし、子どもたちが想像する生き物を思い通りに製作する題材を取り上げ、具体的に検討します。

序論で示された『造形表現』の五つの内容要素で本題材を整理すると、次のようにまとめられます。

- ア 表現対象／空想の生き物
- イ 表現材料／粘土
- ウ 表現形式／彫塑表現
- エ 表現様式／主に具象的表現
- オ 表現技法／手びねり

では、本題材の中でどのように「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性

等」の資質・能力を捉えればよいのでしょうか。以下、三つの柱ごとに検討してみます。

○「知識及び技能」

「知識及び技能」には、二つの側面があります。一つ目は、教員が教授する知識・技能です。これは、題材の実施に伴い、作品製作が必要となる知識・技能です。例えば、先述の「オ 表現技法」の手びねりのバリエーションには、ひねり出す、接合するといった成形方法や、へらや切糸等の用具の使用方法が含まれます。これらは、教員が教授可能な内容です。

二つ目は、子ども自身が自らの造形活動の過程で創出・蓄積・洗練・応用する知識・技能です。例えば、二つの粘土の塊を接合する場合、その角度や大きさ、形状の違いによつ





て、接合のしかたは無数に存在します。これらすべてを教員が教えることは困難ですが、多くの場合、子どもは試行錯誤する中で最も適した方法を探し出し、新たな知識・技能として獲得していきます。図画工作や美術ではこのように、子どもが知識・技能を生み出す主体であることにも留意する必要があります。

○「思考力、判断力、表現力等」

この柱には、序論にもある通り、数多くの能力が含まれます。そこで、図画工作や美術で重視される発想や構想の能力に絞って具体的に考えてみます。

本題材では、「ア 表現対象」は空想の生き物です。この生き物を立体で表す場合の発想や構想には、子どもたちがもつ興味や知識の認識・比較・俯瞰・吟味・応用や、イメージを具現化するための計画性等が含まれます。さらに形態面でも、立体は上下前後左右どの角度からでも鑑賞が可能ですので、足や尻尾の大きさ・位置・角度等を全体像との関係で考案する必要があります。このよ



うに、立体に表す活動における発想や構想の能力には、多様な認識のチャンネルを連続的・往還的に働かせ、統合させるところに特徴があります。

○「学びに向かう力・人間性等」

立体に表す活動では、どのような汎用的な能力や態度の育成が目指されるのでしょうか。ここでは、特に重要と考えるものを二点挙げます。一点目は、多角的なものの方や考え方ができる能力です。立体は、現実の三次元空間に質量をもって存在します。そのため、形態のアイデアのみならず、材料の特性の理解や安

定した構造の実現等、複数の要件を同時に満たすことが求められます。このことは、一つの物事を多角的に捉える能力の育成につながると考えます。

二点目は、態度面における、物事を最後までやりきる忍耐力や責任感の涵養かんようです。立体の作品制作では、時に重力や接着の現実的な問題が発生し、それを克服しながら粘り強く製作に取り組むことが求められます。つくることの楽しさに加え、発生する問題をたくましく乗り越え、自らが設定した到達点にたどり着こうとする態度の育成が期待されます。

これら、三つの資質・能力が相互に関連し合い、「生きて働く」ことが求められています。



池田史志
(いけだ さとし)
広島大学
准教授

アクティブ・ラーニングとしての 図画工作・美術の授業

―二つの「資質・能力」を育てる教育方法の実際―

学習指導要領の改訂で、全ての教科において「育成すべき資質・能力」を明確化し、そのための授業の実践が求められています。三つの柱の中で、「学びに向かう力、人間性等」は、教えることはできませんが、重視すべき事項と考えます。

今までの「作品づくりのための図画工作・美術」では、「資質・能力」の育成という面は弱いものでした。作品づくりを「教える」ことから、表現行為の過程を通して「育てる」教育への転換が求められているわけです。

○「資質・能力」を育てる

導入段階の工夫

授業の導入段階では、子どもたち自身が「課題」をもち、表現への意



イラスト
山形大学 2年生 梅澤 里奈

欲をもてるような工夫が必要です。

最初に作品例を示してしまうと発想する力は育ちません。まずは、対話的な話し合いから発想する時間を確保したいと考えます。それをクラスで共有し、考え合う経験の積み重ねで「思考力、判断力等」の育成が期待できます。そこには、表現そして「学びに向かう力、人間性等」が原動力となります。互いに共有し、刺激し合うことで、教えることこそできませんが、自主的な表現意欲の育ちが大いに期待できるのです。

○「資質・能力」を育てる

授業展開の工夫

展開段階では、一人一人の「課題」に対して試行錯誤しながら取り組むことが重要となります。自らの課題に意欲的に取り組む姿こそがアクティブ・ラーニングと考えます。そこでの教師は、個々の思いや願いに寄り添いながら、支援する存在でありたいものです。安易な声かけや、スルーしてしまうことも問題といえます。温かく見守りながら、困っていてもすぐに助言するのではなく、一

緒に悩んでくれる存在が子どもには必要かもしれません。

例えば、造形遊びの学習とは、子ども自身が造形感覚を駆使して、材料や場所に働きかけながら試行錯誤して表現していく行為といえます。その主体的な行為の過程こそが大切にすべきところです。

図画工作・美術は、過程を通して「思考力」や「判断力」、そして「表現力」が身につけていくものです。





そして「知識及び技能」は、最初にありきではなく、その過程における必要性から教えることで、子どもにとって本当に生きる知識と力になります。

○「資質・能力」を育てる

授業の振り返り

授業を片付けの注意で終わらせてはいませんか。アクティブ・ラーニングでは、自身の「課題」に授業でどう取り組み、どうなったのか個別・クラスでの「振り返りの時間」が重要です。製作途中であっても発表し合うことで発想や工夫を認め合うこ

とができます。これは「対話的で深い学び」の一つであり、本時の学びを相互に確認することができます。また、次時の学習へつなげる重要な場面ともいえます。

○造形美術表現こそが、

アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングとは難しいものではなく、図画工作・美術科ではごく当たり前に取り組んできた事項です。一人一人の子どもが表現したい思いや願い、「課題」をもち、表現するために試行錯誤しながら、「自主的」によりよくしようと工夫することが、結果的に「深い学び」になってきたと考えるからです。

図画工作・美術科は、造形美術表現を通して「資質・能力」を育成できる、他教科にはない本場にすぎらない教科なのです。

画像提供

山形大学附属小学校 荒垣 靖教諭
山形大学附属中学校 高嶋 裕也教諭



降旗 孝
(ふりはた たかし)
山形大学
教授

ちかごろ気になる...



自由と枠と創造性

茨城県神栖市立大野原小学校 校長
横田 次男 (よこた つぎお)

昨年5月。勤務している小学校に男子の大学生A君が教育実習にやってきた。A君はなかなか好青年である。指導教諭の指導をどんどん吸収していく。子どもたちとの関係も良好だ。授業の腕はまだまだだが、一生懸命さが伝わってくる。実習は無事に終わった。

採用試験の結果報告を楽しみにしていると、ほどなく合格しましたとの連絡があった。職員もきっと彼ならいい教員になるだろうと誰もが思っていた。

ところがである。4月になったある日、市役所で職員として働く彼と顔を合わせたのである。尋ねてみると市役所も受かったのが市役所に入ったというのだ。私は頭が真っ白になった。自分には考えられなかったからだ。なぜなら同じ公務員とはいえ、先生には子どもの成長に関われる喜びがある。「先生、わかった!」「こうすると、できるんだね!」などの言葉に、教師になってよかったと思ってきた。その言葉を聞きたくてさまざまな工夫や仕掛けを考えた。

毎日、こんなうれしい体験ができるのは、ほかにはあまりないのではないだろうか。A君も実習中に何度も感じていたように見えたのだが…。

やはり、教師は「ブラック企業」というイメージが定着しているのだろうか。自由になる時間が役所勤務に比べて少ないからなのだろうか。仕事の中身は学校のほうが自由に行えることがあるはずだと私は考えているのだが。今、教員を目指す学生が激減している。その理由には様々な要因が重なっているが、「自由」と「枠」と「創造性」のバランスが崩れていることに起因しているように思えてならない。

子どもたちが大人になった時の状況はますます困難である。だからこそ、造形教育では題材の「自由」と「枠」のバランスを見極め、主体的に創造性を発揮する意味や価値を繰り返し味わえる学習経験を積み重ね、困難を乗り越える力としていきたい。



鑑賞の授業はやっぱり楽しい

兵庫県神戸市立渚中学校
宮地 初穂 (みやち はつほ)

鑑賞の授業が好きです。教師になりたての頃に生徒全員を美術好きにするという遠大な計画のために取り組んだのが鑑賞の授業でした。最初是对話による鑑賞授業について実践している人も少なく、学べるところを見つけては出かけていきました。まだまだ勉強中の未熟者ですが、今は来年度の兵庫県造形教育研究大会に向けて、デザインを鑑賞する授業をチームでつくっています。授業を受けた後、ちょっと見方が変わったり、身のまわりにあるものすべてが、誰かの思いや考えがあってつくられているということに気づかせたりするような、短時間で誰でもできる鑑賞授業を考えています。

さまざまな鑑賞の授業をしましたが、生徒はいつでも本当に素直に楽しんで作品の本質に迫ってきます。私のほうが生徒の導く新しい発見にいつも驚かされます。「鑑賞っておもしろい。」という生徒の顔を見ると、また新しい鑑賞の授業をつくりたいと思ひ、やりがいを感じています。

この鑑賞授業をより深い学びにしていくにはどうしたらよいのかということ最近ずっと考えています。制作と鑑賞

をリンクさせて、自分の五感をフルに使って作品を感じ取り、自分の経験や記憶を呼び覚ますことで、自分自身をより深く見つめ直す授業ができないかと試行錯誤しています。

ただ、鑑賞授業をしっかり行うには下調べが重要です。新しい授業を考えるたびに、知りたいこと・調べたいことが山のように出てきてワクワクすると同時に、自分のもっている時間の短さを痛感します。一人ではできないからこそいろいろな先生方とこれからも情報を交換し、よりよい授業を協力してつくっていただけたいと思います。





埼玉県立近代美術館

埼玉県立近代美術館

緑豊かな北浦和公園には、広々とした芝生や音楽に合わせて水が踊る音楽噴水があり、憩いのひと時を過ごすことができます。また、公園内には野外彫刻が数多く設置されているので、日常の中にアートを感じるすることができます。

そんな公園の中心に、正面の入口にはクチバシのように突き出た格子状の構造体を持つ建物があります。黒川紀章が1982年に設計した埼玉県立近代美術館です。まるで鳥かごのような格子内に入ると、正面には波上の曲面ガラスがはめ込まれており、晴れた日には青空や格子を映し、くねくねと反射して不思議な空間に感じられます。建築家の意図としては、内部と外部をつなぐ中間領域であり、来館者にアートを楽しむ期待感を膨らませる魅力的な場所です。外壁の色は「利休鼠」というすべての色が混ざりあつてできる灰色を、日本の美意識の象徴として採用

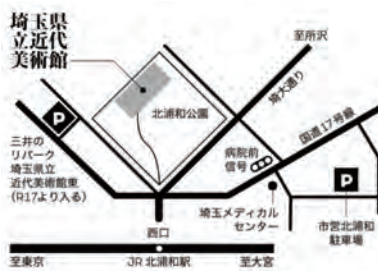


埼玉県立近代美術館

〒 330-0061
さいたま市浦和区常盤 9-30-1
TEL048-824-0111

JR北浦和駅西口より徒歩3分（北浦和公園内）
開館時間：10：00-17：30
（展示室への入場は17：00まで）

休館日：月曜日
（祝日または県民の日の場合は開館）
年末年始、メンテナンス日



しており、この格子を形成する正方形も黒川建築の美術館の特徴のひとつです。

展示室は1階にMOMAコレクションの展示室、2階に企画展の展示室があります。建物中央には地下から3階まで貫く吹き抜けが設けられ、ガラス屋根から自然光が入ります。天井から展示物がつるせるようになっています。地下には3体の彫刻が設置されていますが、この空間を利用して、ミュージアムコンサートを行ったりしています。

また、収蔵作品が展示室の外にもあることが特徴です。宮島達男《Number of time in Coin-Locker》や階段の途中にはガラスを突き破っている田中米吉《ドッキング》（表面）No. 86・1985》などがあり、作品を探す楽しみもあります。

開館当初から収集した優れたデザイン椅子にはただ鑑賞するだけでなくだれでも座って楽しむことができ、来館者の心を和ませています。

MOMASのとびら

土 曜日の午後、子供を中心にするすべての世代が楽しめるプログラム『MOMASのとびら』を実施しています。事前申込制のプログラムでは、毎回違う内容を提供しているためリピーターも多く、プログラムの1番の特徴は、鑑賞と表現が一体となっている点です。美術作品を「対話による鑑賞」で見ながら、作品に関連した表現活動を行って作家の考えを追体験するといったプログラムなどを実施しています。

一方で、公園に遊びに来た小さなお子様連れや地域の方が気軽に参加できるように申込不要のフリープログラムにも力を注いでおり、【洗濯ばさみで絵を描こう！】【アート★ビンゴ】など定番化された人気プログラムもあります。

当館の収蔵作品は、2018年3月現在3706点になります。埼玉の近代美術を核として、これに

影響を与えた優れた作品を収集し、年4回展示を行っています。企画展は、年5回行っています。学芸員の研究により、美術史の検証、初めて紹介される美術家、国内外の優れた作品による展示は、来館者に常に新鮮な感動や現代の問いを投げかけます。しかし、「美術って難しい」「良さがわからない」「あまりみたことがない」と、誰もが美術に関心があるわけではありません。展示の内容はもとより、来館する子供たちや親子へ、難しいことをわかりやすく伝え、たくさん考えたり、心をゆさぶったり、美術作品との「出会い」を出し楽しい体験を届ける鑑賞ガイドやワークショップは、美術館でも重要な役割を担っています。

例えば、こんな出来事を楽しんでいます。

みる+つくる

企画展物語（対象：親子）

【あべのぶや阿部展也】あくなき越境者 2018.9/15〜11/4

晩 年の作品《R・9・ROMA》 ってくるものに神秘や美しさを感じたは、作者が幼少期に卵から出 経験から作られています。そこで、



卵が「パカッ」と開いて絵が飛び出す作品を作りました。絵はたこ糸を使って描きます。絵の具をつけた糸を二つ折りにした画用紙に好きなように挟んで、画用紙を押さえながら色々な方向にひっぱります。開くと美しい曲線や複雑な模様ができました。その中に生き物の形を探し描き加えました。卵の殻のパーツを両端につけて完成！鑑賞会では、中から出てくる意外なモノをみんなで楽しめました。



みつけ！ (対象..4才~6才)

展 示室で丸山直文《puddle in the woods 6》を見ました。

「大きな絵に何が描いてあるのかな?」「金魚、ヨット、帽子、恐竜の足と頭…」など、色々なモノが見てわかりました! この絵は、森の中

の水たまりをイメージして描いたり、水でつくるにじみを生かしたりして制作をしています。幼児も、マジックやクレヨン、そして霧吹きや水鉄砲を使って楽しく制作しました。

他にもオリジナルなプログラムがたくさん!

また、学校との連携も強化していきます。団体案内、授業協力や教員向け研修を通して、様々な鑑賞の方法や作品の楽しみ方を紹介し、豊かな鑑賞活動が広がるように努めています。

(文・写真提供 埼玉県立近代美術館)



教材研究
〔小学校〕

トントンくぎ打ち、 コンコン ビー玉

■ なが お ひろかず 長尾 宏一 埼玉県戸田市立笹目小学校

3
年生

工作

4
時間



題材のねらい

細長い板材にくぎを打って、ビー玉がゆっくり転がるコースを友だちとつくることで、発想豊かにコースを考えたり、くぎを打つことを楽しんだりする。

材料・用具

板材(19×89×1820mmまたは38×89×1820mm)、くぎ(25～38mmで2～3種類)、ビーズ、瓶の王冠、カラー輪ゴム、ビー玉、かなづち、くぎ抜き、ペンチ

評価の観点

- 関** ビー玉のコースを考えたり、くぎを打ったりすることを楽しむ。
- 発** ゆっくりと転がるコース、形や色、動きが楽しいコースなどを考える。
- 創** ビー玉をしっかりはじくように、くぎの打ち方を工夫する。
- 鑑** ビー玉の転がり方を楽しみ、それぞれのビー玉コースのよさに気づく。



学習の流れ

- ① 安全な使い方、くぎがビー玉を
はじくおもしろさなどを知る。
- ② みんなで木材にくぎを打った
り、ビーズや王冠などをくぎで
打ちつけたりして、ビー玉がく
ぎにはじかれながら通るコー
スをつくる。板材からビー玉が
落ちないようにくぎを打った
り、輪ゴムをかけたたりする。
- ③ ビー玉の転がり方を試し、くぎ
にはじかれながらゆっくり転
がるようにするにはどうした
らよいか、みんなで考えを出し
合い、くぎを打ったり抜いたり
する。
- ④ それぞれのグループでつくっ
たビー玉コースを並べて、
「ビー玉ゆっくり転がるレー
ス」をして、みんなで楽しむ。
- ⑤ 他学年の子どもたちにも「ビー
玉ゆっくり転がるレース」を楽
しんでもらう。十分に楽しんだ
後はくぎを抜いて、木材は再利
用できるようにする。

本

題材は、グループで考えを出し合いなが
ら、細長い板材にくぎを打ってビー玉が
転がるコースをつくり、その転がり方を楽しむ
活動です。この活動を通して、くぎの打ち方と
抜き方を知り、慣れ親しむことができます。

コースになる材料は、ホームセンターでも購
入できる安価な建築材を用いるとよいでしょ
う。ただし、木材が反つているとくぎを打ちに
くいので、反っていないことを確認して購入し
ます。また、学校では、直射日光が当たらない
場所に保管します。

まず、くぎの打ち方と抜き方をやって見せ、
子どもたちにそのポイントをつかませます。か
なづちとくぎ抜き方の安全な使い方はしっかり指
導したいです。また、くぎを手で持って打つ
のが難しい場合は、ペンチでくぎを挟んで打つ
よいことを教えます。その後、

あらかじめくぎを打ったコース
を用意しておき、ビー玉を転が
して見せ、活動への関心・意欲
を高めるとともに見通しをもた
せます。そして、「ビー玉がす
ぐに転がり終わるより、ゆっく
り転がるほうが楽しい。」とい
うことを押さえて、子どもたち
の活動を始めます。

子どもたちは、グループごと
に話し合ったり、ビー玉の転が



り方を確かめたりしながらコースをつくりま
す。くぎだけではなく、ビーズや瓶の王冠
高学年の木工作で出た端材などを打ちつける
とおもしろいコースや、色合いのよいコース
ができることにも気づかせたいです。カラー
輪ゴムをくぎにかけてもよいでしょう。輪ゴ
ムは、くぎとくぎの間隔が広いところにつけ
ると、ビー玉がコースから飛び出すことを防
ぐこともできます。この活動で大事なことは、
常に試しながら考えを出し合い、より楽しい
コースをつくることです。

完成したら、全グループのコースを並べ
て「ビー玉ゆっくり転がるレース」をして楽
しみます。また、自分たちの作品で他学年の
子どもたちにも楽しんでもらうとよいでしょ
う。

人の形・動きをとらえる

ひらがたくや
■ 平賀 卓也 静岡県浜松市立都田中学校

1
年生

絵

2
時間



題材のねらい

人体の量感や骨格、各部のつながりのバランスをとらえて、描画材料を工夫して、人体の美しさを描く。

材料・用具

墨汁、半紙または和紙、不要になった布きれや服、刷毛、小皿、新聞紙

評価の観点

- 関** 人体や人体の動きを描くことに関心をもつ。
- 発** 人体を観察して、量感や骨格、各部のバランスなどを考える。
- 創** 人の形や動きをとらえ、刷毛で線の強弱をつけるなどして、工夫して描く。
- 鑑** 人体を表情豊かにとらえることについて話し合う。



学習の流れ

- ① 布や刷毛のスケッチの前に、鉛筆で人体を描く。
- ② 刷毛を使って描く。
初めに書道のように刷毛を動かす練習を行い、次に動きのあるポーズでクロッキーする。(刷毛を使って描く前に布を使って人型をつくる練習をする方法もある。)
- ③ 描いたものを互いに見せ合い、形や動きをどのように表情豊かにとらえたか話し合う。

本 題材は、人の形や動きをとらえ、生き生きと描くことで何気ないしぐさや動作のもとなる心の感情表現への発展につなげていくものです。

指導のポイントとしては、「人体は、体の各部がつながり、動くことで美しい姿をつくり出している」ことに気づくことから始まります。四肢の動きは肩、腰を通ってつながります。文字通り、「一筆描きのようにとらえてよい」と理解します。墨汁と小刷毛を使って体の線を描いていくわけですが、着衣の皺や形はあまり意識せずに、体の形をとらえることに着目して大胆に描きます。小刷毛は刷毛幅全体を使っ



たり、角度を変えたりして強弱をつけます。はじめにそのような意識していると、描く気持ちに余裕が生まれます。鉛筆などの描画材料との違いは、形の輪郭を線で描くのではなく、人の形そのものを面や量感で確かめていくところにあります。一筆描きのようにして描く楽しさと確かな体の動きを把握することは、動きのあるさまざまなポーズを生み出す発想につながり、活動に夢中になる生徒の姿が見られるようになります。

刷毛の使用は対象から余分な形や要素を省略し、美しい形を探る画家の視点に近づけるものです。

その他に、モデルを見ながら布などを使って体を型としてとらえる方法があります。布の柔らかさが、体の曲線や量感をとらえやすくてくれます。また、等身大にすることで彫刻のような存在感が生まれます。こうしてつくった



人型を観察するクロッキーも行いました。このように、クロッキーするための方法も道具も一つではありません。生徒たちはこの学習によって、さまざまな方法から多様な見方や考え方ができるといふことを学びました。また、今回の活動を通して、感情を体で表すことや心の感情表現への広がりを感じ取ることができたと思います。

展覧会 レポート Pick Up Exhibition

造形さがみ風っ子展

淵野辺公園会場



太陽の光が透過して、展示台にさまざまな色が映ってとてもきれいでした。



女子美アートミュージアム会場

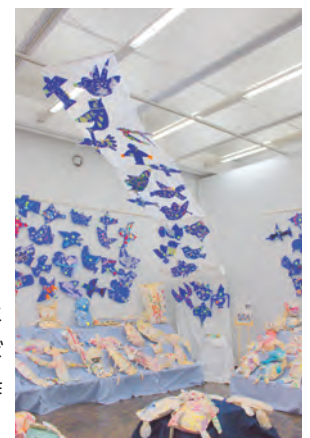
布と展示台を使って、さまざまな動物が海と陸にいるように展示しています。



染めた布を木々を使って吊るしています。風が吹くとゆらゆらとたなびきます。



天井から吊るした布に青い鳥たちが空を羽ばたいているように、作品を飾っています。



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎ 03-5684-6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西6-11 札幌北辰ビル8階 ☎ 011-231-0403
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区福岡4-3-10 仙台TBビル4階 ☎ 022-742-1213
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市中区星が丘元町14-4 星ヶ丘プラザビル6階 ☎ 052-789-1741
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16 ☎ 06-6531-5782
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2丁目1番5号 FYCビル3階 ☎ 092-733-0174